

令和 3 年 5 月 21 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03726

研究課題名(和文) 自由意志信念や認知の社会心理学的帰結：哲学との協同による統合的検討

研究課題名(英文) Free will and moral judgment

研究代表者

唐沢 かおり (Karasawa, kaori)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：50249348

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は次のように纏められる。1) 自由意志信念概念の多様性分析と、それを測定する妥当な尺度の開発、2) 自由意志信念否定のメッセージの効果や、自由意志信念、道徳的判断、量刑判断の関係の解明、3) 自由意志信念が報復としての攻撃行動に与える影響の解明と自己制御に関する考察、4) 自由意志およびそれと密接に関わる意図の推論がもたらす帰結に関して、集団や人工物(AI)への判断にも拡張可能であることを実証、5) 自由意志に関する哲学的重要性と心理学的重要性が交差する問題領域の議論の精緻化、6) 研究成果を統合する議論として、自由意志概念、およびそれと関連する心や自己概念を、概念工学的立場から構築。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、自由意志・それと関わる心的機能・決定論をめぐる諸信念や認知(以降、自由意志関連信念・認知と呼ぶ)の社会心理学的機能を明らかにするなかで、自由意志関連信念・認知の効果をめぐる実証的知見の提供に加え、自己制御や対人認知という社会的認知のコア領域の知見を、「自由意思信念-決定論的信念」という軸により、道徳的な判断や行動という観点から統合的に再構築した。また哲学との連携により、人文的な問い(我々の自由意志の存在や行動の決定因の概念構造)を実践的な問い(自由意志がもたらす心的過程という科学的知見をどのように生かすのか)にも概念工学という立場から展開した。

研究成果の概要(英文)：The results of this research can be summarized as follows. 1) Analysis of the diversity of the free will concept and the development of a scale to measure it, 2) Elucidation of the effect of the message of free will belief denial and the relationship between free will belief, moral judgment, and punishment judgment, 3) Elucidation of the effect of free will belief on offensive behavior as retaliation and consideration of self-control, 4) confirmation of external validity of the findings regarding regarding the consequences of inferring the will and intentions for the cases of groups and artificial objects (AI) 5) refining the discussion of problem areas where philosophical and psychological importance of free will intersect, 6) as a discussion that integrates research results, the concepts of free will and self are examined from a conceptual engineering standpoint.

研究分野：社会心理学

キーワード：自由意志 道徳的判断 心の推論 分析哲学 実験哲学

1. 研究開始当初の背景

「自由意志」に関する信念や他者の心的機能の推論と、対人判断や自己制御に関する行動との関係の検討が進み、自由意志の存在を信じることが自己制御的行動や道徳的行動を促すこと、また、意図や自律的判断能力などの心的機能の知覚が、他者に対して厳しい道徳的責任の付与につながるという主張がなされてきた (Baumeister et al., 2009 等)。「自由意思と決定論の対立」という哲学の伝統的議論の枠組みを援用したこれらの研究は、近年の科学的知見に基づく「脳内過程決定論」「遺伝子決定論」とその倫理的含意や、道徳性の進化的基盤に関する議論にも拡大してきた (Haidt, et al., 2010, Chuchland, 2011 等)。このような動向は、自由意志をめぐる認知や信念が、「道徳的主体 (moral agent)」としての人間の行動を律する可能性を論じたものでもあった。

しかし、自由意志や決定論的要因に関する信念・心的機能の認知が判断や行動に及ぼす際の心的メカニズム、調整要因や媒介要因は、十分に解明されていなかった。人々が素朴に抱く自由意志の理解は、運、遺伝子、社会的要因などの決定論的要因と対峙するものとして概念化され得るが、これら決定論的要因への原因帰属に関する旧来の知見を取り込み、自由意志と決定論的要因との関係を相対化したうえで、包括的なモデルの提案が求められていた。さらには、自由意志の存在を否定したり、脳や遺伝子が行動を決定する可能性を人々に提示することの効果の詳細な検討とそれに基づく課題を、道徳基盤という視座から検討することも求められていた。

2. 研究の目的

本研究は、自由意志に関連する信念や認知が道徳的判断や行動に与える影響を検討するとともに、その成果を基盤として人々の自由意志信念に関する情報をもたらす社会的含意を考察し、自由意志をめぐる社会心理学的研究の成果を統合的に考察するプラットフォームを確立することを目的とする。また、その際、自由意志に関連する信念や認知として、自由意志のみならず、それと関連する心的機能 (意図性や自律的な意思決定能力など) および旧来社会心理学で論じられてきた様々な決定論的要因 (運命や脳決定論・社会決定論など) に関する信念や認知にも焦点をあて、自由意志概念を相対化しつつ分析哲学との共同により明確化すること、および、原因帰属や心の知覚と道徳的判断研究などの主要な社会心理学領域における知見との統合を図る。具体的に目的とするのは、次の4点になる。

(1) 自由意志関連信念・認知の概念構造の解明

自由意志信念や、関連する心的機能、および決定論的要因に関する信念・認知を対象に、概念間の関係と構造を明らかにする。また、実証的検討の過程で、これまで開発してきた「自由意思決定論的信念」に関する尺度 (渡辺ら 2013) を精緻化し、今後の研究に資する有用な尺度を構築する。

(2) 自由意志関連信念・認知が自己制御行動に与える影響の解明

自由意志関連の信念や認知が攻撃行動など道徳的な含意を持つ自己制御行動に与える影響と、その影響を説明する社会的認知過程を明らかにし、モデル構築を行う。モデルは、自由意志または決定論的要因に行動が制御されているという信念や認知が、自己制御動機・道徳的概念・目標の活性を経て、自己制御行動の実行意図と行動に影響するというプロセスモデルの形を基本とする。

(3) 自由意志関連信念・認知が道徳的な対人判断や対人行動に及ぼす影響の解明

自由意志関連信念や認知が、道徳的・非道徳的行動を行った他者への判断と行動及ぼす影響を検討する。その際、心の知覚と道徳的判断に関する議論 (e.g., Grey et al., 2007) を、自由意志関連の心的機能認知と判断や行動に関する知見の解釈に導入し、自由意志関連の信念や認知を統合的に説明可能なモデル構築を目指す。

(4) 自由意志概念のあり方に関する統合的考察

得られた実証的知見と規範的議論を統合し、自由意志や決定論的要因など、人間の自律性、行動統制にかかわる科学的な知見や概念をどのように構築すべきかについて、社会心理学と分析哲学の学際的協同により考察を行う。

3. 研究の方法

本研究計画は、社会心理学的な「実験・調査」による実証的知見の生成を核とし、それに分析哲学を基盤とした「文献研究」を密接に連携させることで遂行した。目的に対応したサブプロジェクトを設定し、これらを社会心理学者と哲学者の協同で順次進めるとともに、各プロジェクト間での成果については、研究分担者や協力者によるワークショップ等を定期的開催することで共有、展開をはかるとともに、迅速に学会や論文、書籍にて発表し、多様な分野の研究者から

の批判を得て、精緻化することを目指した。

自由意志関連信念・認知の概念構造の解明については、哲学領域と心理学領域それぞれにおける文献研究を行うとともに、一般の人々が保持している通俗的理解の解明に向けた調査研究・尺度構築研究を行った。また、それらの成果に基づき、文献が示す自由意志概念と人々の素朴理解との整合性や齟齬について考察を行った

自由意志関連信念・認知が自己制御行動や、対人判断、対人行動に与える影響の解明については、実験的検討が主体となった。基本的な実験パラダイムは、様々な違反場面を対象とし、自由意志・決定論的信念の個人測定や実験的操作を行い、違反者に対する反応を測定するというものである。その中で、研究の目的に応じて、自由意志の関連概念である統制感・効力感、自己の行動の原因帰属、心的機能の知覚といった変数や、違反者の違反後の行動（謝罪など）に関する変数を導入し、知見の精緻化を試みた。主に用いたのは、倫理的な制約上から、仮想的場面を提示した質問紙実験であるが、攻撃行動にたいする報復研究など、実際の行動指標の測定が可能なものについては、コンピューター上でのゲームという設定を用いた実験を実施した。

自由意志概念のあり方に関する統合的考察については、文献研究や実証的研究の知見について、随時、統合するための議論をメンバー間で行うとともに、学会のWSの場を用いて、議論の精緻化とさらなる課題の発見へとつなげた。成果については、それぞれが発表する論文や書籍のなかで論じ、自由意志関連の信念や認知の変化が「自由意志を持つ道徳的主体」としての人間観に与える影響や社会的帰結について、社会心理学と哲学の融合による知が示す貢献を明らかにした。

4. 研究成果

(1) 自由意志信念が道徳的判断や行動に与える影響を検討するためには、信念を測定する妥当な尺度が必要となるが、これまでに行ってきた研究から、人々が自分自身の自由意志と他者一般の自由意志に対して保持する信念の程度が異なっていることが示唆されている。この点を踏まえて、一般的・個人的自由意志尺度を開発するための研究を実施した。具体的には、一般的・個人的自由意志尺度（Free Will and Determinism Scale; FWDS）日本語版の作成に取り組み、妥当性と信頼性を持つ尺度を構築した。またそのなかで、尺度自体が自由意志信念の概念定義の機能をもつことの指摘とその問題についての考察を行った。

(2) 自由意志信念の測定手法が多岐にわたる現状を整理すると共に、関連する概念の素朴理解やその影響に関する文化比較研究にも携わり、そこでの知見を援用しながら、日本における自由意志信念の理解に関する特徴を、自由記述データを元に議論した。その結果、他行為可能性、行為者性、制約からの自由が主な構成要素であることが確認され、日本人にとって自由意志とは、「何ものにも拘束されず、自分の心理状態にそって行為を選択する」ことを基本的に意味することが示唆された。

(3) 自由意志信念と道徳的判断や量刑判断などの司法的判断の関係について検討を行った。自由意志信念を実験的に操作した研究では、人々の自由意志信念が元々高い水準にあることに着目し、信念を否定するメッセージの効果に着目した。その結果、個人差として測定された自由意志信念の強さが、逸脱行為の原因や責任の認知、非難に及ぼす影響が、否定的メッセージを受けた状況において確認される一方、統制条件では見られなかったことから、自由意志の否定が、リアクタンスを生じさせ、道徳的判断に影響することが示唆された。

また、犯罪行為を題材として、自由意志信念、道徳的判断、量刑判断の関係について、自由意志信念が「罰の効用」に関する信念とも関わるという仮説のもと、その媒介的役割も含めた検討を行った。その結果、自由意志信念が道徳的判断を媒介し、量刑判断に影響することは確認されたが、罰効用信念と自由意志信念の関連は見いだされず、両者の独立性が示唆された。

(4) 自由意志信念が報復としての攻撃行動に与える影響について、松本・櫻井・渡辺・唐沢(2014)を踏まえ、攻撃特性に関する個人差、自由意志信念の下位次元の役割、応報動機との関係に着目した検討を行った。実験結果は、自由意志信念の下位次元である運命的決定論が攻撃頻度に対して影響を与えることというものであり、自分の攻撃行動に対する責任が、相手からの攻撃に帰属できない場合、運命的決定論へのコミットメントが低ければ、自分の攻撃行動の責任は、より自己に帰属されることを通して、攻撃行動を抑制すると解釈される。つまり自由意志信念の一部である運命的決定論は、個人の行動に関する「責任の感じ方」に影響することで、報復的な攻撃を抑制する可能性がある。自由意志信念が私たちの自己制御行動を支える基盤となる可能性は、他の多くの研究が論じているとおりであるが、報復としての攻撃に関する心的メカニズムの側面が示唆されたと言える。

さらに、検討を攻撃から、自己制御行動一般に拡張し、自由意志信念が、道徳的自律への責任感を喚起した結果、対人態度や行動での自己制御が高まるのか、それとも、「自由な行動」への志向が高まることで、非自己制御行動（攻撃、報復など）につながるのかを検討した。これについては、複数の実験を行ったが、自由意志信念の直接的効果に関する安定的な結果は見いだせなかった。むしろ、自由意志信念自体ではなく、行為の原因帰属、さらには、行為者が逸脱行為後

に取った行動（謝罪、支援的行為、攻撃など）の影響が大きく、加えてこれらの変数間には相互依存関係が存在することも示されている。従って、単一の行動ではなく「行動の連鎖」に着目し、そこに自由意志の認知や関連する推論がどのように関わるのかを明らかにするための研究が必要であると考えられる。

（5）自由意志およびそれと密接に関わる意図の推論がもたらす帰結に関する実験的検討を行った。他者の中に自由意志を見出すことの影響に関する研究成果と従来行われてきた意図の知覚の影響に関する研究知見とを俯瞰的に展望する中で、個人への判断を集団や人工物に拡張することの意義を論じ、前者についてはステレオタイプの判断を対象に、責任の判断、罰の判断やその根拠などに与える影響も含め、検討を行うこととした。また後者についてはAIの心の推論に着目し、AIに付与する道徳的立場を軸として検討を行うこととした。

ステレオタイプの判断、さらには集団に付与されたスティグマに関する判断については、集団メンバーが保持する自由意志の推論がネガティブな集団に対する判断を極化させる可能性が示唆された。一方で、非人間化に関する従来の研究は、自由意志を他者に知覚することが自律的なエージェントとしての認知を促進し、道徳的な立場の付与につながることを示唆している。従って、自由意志や意図の存在に着目を促すコミュニケーションの効果は両面価値的であることになる。ステレオタイプ化された他集団については、意図の推論自体がステレオタイプの判断の影響下にあることも予測されるので、単純な処方では得られないが、望ましい相互作用の促進について、行為の意図性や、その対局である決定論的要因の知覚を詳細に検討する必要が明らかとなった。

AIに対する推論に関しては、事故時にAIに責任を負わせることと科学技術開発との関係についても議論に含めた。実験的検討から明らかになったのは、素朴な責任認知や道徳的立場の付与が、自律的意思決定の認知に依存することであり、素朴認知のレベルでは、自由意志信念よりも、意思決定のメカニズムに関する「アルゴリズム」認知が影響をもつことである。一方で、責任を「とれない」存在としてのAIの事故について、AIの擬人化がなされるほど、因果的関与が低い関係者全体に非難や補償の要求が高まる可能性が示唆された。以上の結果は、行為の自律性と責任とが連結していた従来責任論について、科学哲学の立場から、その再構築が必要であるという論点を示すものであり、加えて、自由意志が責任・道徳論の基盤になっていることは是非、また、自由意志が仮に否定された場合に、いかに責任や道徳という概念を維持するのが論点になることが示唆された。

（6）自由意志に関する哲学的重要性と心理学的重要性が交差する問題領域の検討を行った。第一に着目したのは、自由意志の信念や認知に関する記述的知見と規範的議論との対照である。実験哲学や社会心理学からの記述的知見としては、自由意志に関する人々の信念や認知は多元的であり、形而上学的な要素から道徳的責任に関連する要素まで様々である。他方で、哲学的論争における規範的議論は、こうした必ずしも一貫しない内容を持った自由意志の信念や認知を修正し、自由や責任の概念を改定していく試みとして理解できる。自由意志をめぐる最近の学祭的研究は、記述と規範の相互関係がしばしば不明瞭なまま進められてきたが、それをこのように明確化できることを示した。

第二に、自由意志をめぐるより個別的な哲学的論争において、自由意志の信念や認知に関する想定がどのように暗黙に利用されてきたか、その歴史的経緯と方法論的性格に関する検討を行なった。とりわけ、フランクファート型事例として知られる哲学的思考実験では、自由意志に関する直観の重要性は当然視されてきたが、むしろ論証上重要な役割を担うのはそうした直観を生産する認知-情動的なメカニズムのほうであり、その解明において社会心理学や実験哲学の知見がこれまで考えられていた以上に直接的な含意をもつことを指摘した。

第三に、意識と自由意志の結びつきに関する研究を行なった。とりわけ、物理的世界の一部として意識経験を定位することに関する哲学的問題、および意識的な意志に先行して無意識的な脳活動が生じるとする科学的知見に注目して、哲学的論争において自己主体性の認知が果たす論証上の役割について検討を行なった。

（7）研究成果を統合する議論として、自由意志概念、およびそれと関連する心や自己などの概念をどのように構築すべきかという概念工学的観点からの検討を行い、そこにおける課題や今後の方向を整理した。道徳的責任をめぐる哲学的議論においては、記述的問題と規範的問題の境界が存在するが、それらにおいて用いられている自由意志の概念の心理学的解明が意義を持ち、そこに立脚した考察が必要であること、自由意志や自律性の肯定・否定、また、決定論的な要因が、私たちの心的状態や自立的行動を行う自己という概念とも密接に関わるので、その詳細を明らかにする必要があること、道徳的基盤を確保するために、自由意志概念を科学的知見との整合性を保ちつつ維持することが必要であることが、ここで得られた暫定的な結論である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 20件／うち国際共著 5件／うちオープンアクセス 19件）

1. 著者名 Tanibe, T., Hashimoto, T., Tomabechi, T., Masamoto, T., & Karasawa, K.	4. 巻 10
2. 論文標題 Attributing mind to groups and their members on two dimensions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology,	6. 最初と最後の頁 840-
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.00840	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Watanabe, T., Ota, K., & Karasawa, K.	4. 巻 17
2. 論文標題 How do Japanese conceptualize free will?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies	6. 最初と最後の頁 79 - 84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.17.79	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Hannikainen, I. R..Karasawa, K... et al.(45名中25番目)	4. 巻 10
2. 論文標題 For whom does determinism undermine moral responsibility? Surveying the conditions for free will across cultures	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 2428-
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2019.02428	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 太田紘史	4. 巻 52
2. 論文標題 物理主義者であるとはどのようなことか：鈴木貴之『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感じるのだろうか』を評して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 科学哲学	6. 最初と最後の頁 143 - 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹村和久	4. 巻 17
2. 論文標題 心理学と社会物理学：意思決定研究史からの展望とその課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 感性工学	6. 最初と最後の頁 122 - 129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹村和久・村上始	4. 巻 12
2. 論文標題 心理学と行動経済学 古典的心理学と確率荷重関数の関係を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 行動経済学	6. 最初と最後の頁 37 - 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11167/jbef.12.37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田戸岡好香・樋口収・唐沢かおり	4. 巻 89
2. 論文標題 食品のネガティブイメージにステレオタイプ抑制が及ぼす影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4992/jjpsy.89.16039	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり	4. 巻 58
2. 論文標題 大学生における司法参加意欲の規定因：要因関連モデルを用いた検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実験社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2130/jjesp.1704	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.	4. 巻 13
2. 論文標題 Impact of consumer power on consumer 's reactions to corporate transgression	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PLoS One,	6. 最初と最後の頁 e0196819-
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0196819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Cova, F.,...K, Karasawa, et al. (46名中24番目)	4. 巻 0
2. 論文標題 De pulchritudine non est disputandum? A cross-cultural investigation of the alleged intersubjective validity of aesthetic judgment	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Mind & Language	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/mila.12210	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 ターン 有加里ジェシカ・村田 光二・唐沢 かおり	4. 巻 16
2. 論文標題 犯罪者の子どもと 連合的スティグマ - 遺伝的本質主義の観点から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 77-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.16.77	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 太田紘史	4. 巻 46
2. 論文標題 物理主義を論駁することの難しさについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 267-277
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanibe, T., Hashimoto, T., & Karasawa, K	4. 巻 12
2. 論文標題 We perceive a mind in a robot when we help it	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 PLoS One	6. 最初と最後の頁 e0180952
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0180952	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福本都・苫米地飛・橋本剛明・唐沢かおり	4. 巻 15
2. 論文標題 自由意志信念が社会的相互作用場面での攻撃行動に与える効果 運命的決定論信念に着目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.15.73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Rose, D...Karasawa, K, et al., (46名中23番目)	4. 巻 6
2. 論文標題 Behavioral circumscription and the folk psychology of belief: A study in ethno-mentalizing	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Thought: A Journal of Philosophy,	6. 最初と最後の頁 193-203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/tht3.248	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 白岩祐子・唐沢かおり	4. 巻 15
2. 論文標題 刑罰抑制効果の検討: 「理性」重視の価値観に着目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間環境学研究	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.15.25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Rose, D...Karasawa, K et al., (46名中23番目)	4. 巻 u
2. 論文標題 Nothing at Stake in Knowledge. : A study in ethno-mentalizing	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nous,	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/nous.12211	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 H. Hori, K. Takemura, Y. Matsumoto	4. 巻 5
2. 論文標題 Markov decision process in fuzzy events based on the mapping extension principle	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 International Journal of Business and Marketing Management	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田紘史	4. 巻 45
2. 論文標題 意識をめぐる物理主義と反物理主義のバトルライン	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 133-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hashimoto Takaaki, Karasawa Kaori	4. 巻 10
2. 論文標題 When and by whom are apologies considered? The effects of relationship and victim/observer standing on Japanese people 's forgiveness	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 nterpersona: An International Journal on Personal Relationships	6. 最初と最後の頁 171 ~ 185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5964/ijpr.v10i2.214	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 渡辺匠・松本龍児・太田紘史・唐沢かおり	4. 巻 24
2. 論文標題 一般的・個人的自由意志尺度 (Free Will and Determinism Scale; FWDS) 日本語版の作成	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 228 - 231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.24.228	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Tanibe, T., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K.	4. 巻 14
2. 論文標題 Opposition to popular legal participation and the reason-emotion framework: Empirical research on citizens' attitudes toward the lay judge system in Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Human Environmental Studies	6. 最初と最後の頁 9 - 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4189/shes.14.9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Jun, K. & Karasawa, K.	4. 巻 30
2. 論文標題 How we view people who feel joy in our misfortune: The influence of expressed schadenfreude in interpersonal situation	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Korean Journal of Social and Personality Psychology	6. 最初と最後の頁 1 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Fujino Junya, Hirose Kimito, Tei Shisei, Kawada Ryosaku, Tsurumi Kosuke, Matsukawa Noriko, Miyata Jun, Sugihara Genichi, Yoshihara Yujiro, Ideno Takashi, Aso Toshihiko, Takemura Kazuhisa, Fukuyama Hidenao, Murai Toshiya, Takahashi Hidehiko	4. 巻 178
2. 論文標題 Ambiguity aversion in schizophrenia: An fMRI study of decision-making under risk and ambiguity	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 94 ~ 101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.schres.2016.09.006	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計39件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 20件）

1. 発表者名 唐沢かおり
2. 発表標題 『心』の概念工学
3. 学会等名 日本社会心理学会第 59 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠原伊織・唐沢かおり
2. 発表標題 自由意志信念が量刑判断に及ぼす影響：顕在 的動機との関連に着目して
3. 学会等名 日本社会心理学会第 59 回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Karasawa, K
2. 発表標題 Human-robot interaction and perception of subjective state in a robot
3. 学会等名 International Workshop on Morality and Robots: Moral HRI (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K
2. 発表標題 Effects of Agency on Morally Instrumental Harm: A Mouse-Tracking Investigation
3. 学会等名 The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tham, Y., Hashimoto, T., & Karasawa, K
2 . 発表標題 . Egoistic Motives of Concerning Injustice for Others: Justice Sensitivity and SelfConsciousness
3 . 学会等名 The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tanibe, T., Zemba, Y., & Karasawa, K.
2 . 発表標題 Mind Attribution to Social Robots and Elderly Care.
3 . 学会等名 The Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2 . 発表標題 General/Personal Just World Beliefs as Determinants of Attitudes toward Victim of Perpetration.
3 . 学会等名 International Convention of Psychological Science, (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tham, Y. J., Hashimoto, T., Schmitt, M., and Karasawa, K.
2 . 発表標題 Who “volunteers”? The effect of justice sensitivity in a volunteer ’s dilemma at a university dorm
3 . 学会等名 The 9th Asian Conference on Psychology & the Behavioral Sciences (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺藍丸・村上始・竹村和久
2. 発表標題 自己コントロール機能の状況依存性の検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第65回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井出野尚・竹村和久・上田雅夫
2. 発表標題 消費者行動研究と選好形成過程
3. 学会等名 第56回消費者行動研究コンファレンス
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹村和久・相川真鈴・柏万菜・村上始
2. 発表標題 商品選択における視線測定と注視パターンの解析
3. 学会等名 日本感性工学会感性商品研究部会第63回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井出野尚・高橋英彦・竹村和久
2. 発表標題 社会的状況下の意思決定における規則の影響に関する検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Todayama, K
2. 発表標題 Everyone wants us to teach them what happiness is: changing roles of philosophers in a techno-scientific society
3. 学会等名 CCPEA (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 リベット型実験の再検討：経験される自由の観点から
3. 学会等名 科学基礎論学会2018年度総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 心の概念工学にまつわる規範的問題
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠原伊織・唐沢かおり
2. 発表標題 自由意志信念が道徳的判断に及ぼす影響：実験操作による自由意志信念の影響の変化に着目して
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田戸岡好香・植松幹太・谷辺哲史・唐沢かおり
2. 発表標題 ステレオタイプ内容モデルによるうつ病患者イメージの検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 齋藤真由・白岩祐子・唐沢かおり
2. 発表標題 司法参加意欲の規定因：公正さ認知および主体・客体意識の効果
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 唐沢かおり
2. 発表標題 社会心理学の意義を語る 知としての価値、そして公共性
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 榊原瑞清・櫻井良祐・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 道徳ジレンマ問題で道徳判断と行動選択の差を生じる要因の検討：自己制御と共感
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福本都・苫米地飛・橋本剛明・唐沢かおり
2. 発表標題 自由意志信念が社会的相互作用場面での攻撃行動に与える影響 運命的決定論信念に着目して
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会,
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 笠原伊織・唐沢かおり
2. 発表標題 自由意志信念の否定が量刑判断に及ぼす影響 動機の変化に着目して
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Saitoh, M., Shiraiwa, Y., & Karasawa, K
2. 発表標題 The effects of cognition of the lay judge system on intentions to participate in the lay judge system.
3. 学会等名 The Asian Conference on Psychology & the Behavioral Science (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Karasawa, K
2. 発表標題 Judgment bias in social psychology
3. 学会等名 3rd Taiwan-Japan Workshop on Computational Aesthetics (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hashimoto, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Mind attribution of “brain-dead” patient influences people’s attitudes toward organ transplant
3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology Convention (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ota, K
2. 発表標題 The Complex Nature of the Concept of Free Will
3. 学会等名 Hiroshima Philosophy Forum #1 Mind and Cognition (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸田山和久
2. 発表標題 ミニマルな自由意思と責任なき倫理
3. 学会等名 量子基礎論懇話会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸田山和久
2. 発表標題 「ロボットの責任」に関する概念工学の試み
3. 学会等名 ロボット学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Tanibe, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Autonomous cars and responsibility.
3. 学会等名 2016 Annual Conference of the Korean Psychological Association (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Karasawa, K., & Todayama, K.
2. 発表標題 Concept engineering: A road to proposing a better concept definition
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tanibe, T., & Karasawa, K.
2. 発表標題 Self-effacement in human-computer interaction: Social responses toward computers in Japan
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Jung, K. H., Karasawa, K., & Masuda, T.
2. 発表標題 The functions of schadenfreude and gluckschmerz in gossip situation
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tado ' oka, Y., Ishii, K., Kato, J., & Karasawa, K
2. 発表標題 The effects of the growth mindset on two types of envy toward carrier women
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Karasawa, K
2. 発表標題 Engineering the concept of free will (or the belief in free will?).
3. 学会等名 International Conference on Ethno-Epistemology: Culture, Language, and Methodology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Takakai, Y., Ideno, T., & Takemura, K.
2. 発表標題 Comparison between choices by the method of monitoring information acquisition and those by the method of conjoint analysis
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tamari, Y., Haraguchi, R, Ideno, T., & Takemura, K.
2. 発表標題 Computer simulation study of decision strategies in which each attribute is dichotomous.
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 太田 紘史
2. 発表標題 自由意志論を生み出す心理：記述的研究に向けて
3. 学会等名 日本科学哲学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 太田 紘史
2. 発表標題 自由意志はどのように概念化されるべきか：心理学的な記述の規範的な含意
3. 学会等名 道徳・社会認知研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Koji Ota
2. 発表標題 The Philosophical Significance of Social Psychology: The Case of Free Will
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 戸田山和久・唐沢かおり	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 292
3. 書名 <概念工学>宣言！ 哲学×心理学による知のエンジニアリング	

1. 著者名 Machery, E., Stich, S., Rose, D., Chatterjee, A., Karasawa, K., Struchiner, N., Sirker, S., Usui, N., & Hashimoto, T. (4. 発行年 2018年
2. 出版社 Oxford University Press.	5. 総ページ数 315
3. 書名 Gettier was framed. In Epistemology for the Rest of the World	

1. 著者名 唐沢かおり	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 288
3. 書名 なぜ心を読みすぎるのか みきわめと対人関係の心理学	

1. 著者名 堀毛一也, 竹村和久, 小川一美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 培風館	5. 総ページ数 248
3. 書名 社会心理学 - 人と社会の相互作用の探求 -	

1. 著者名 太田 紘史	4. 発行年 2016年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 456
3. 書名 モラル・サイコロジー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹村 和久 (Takemura Kazuhisa) (10212028)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	太田 紘史 (Ohta Koji) (80726802)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	
研究分担者	戸田山 和久 (Todayama Kazuhisa) (90217513)	名古屋大学・情報学研究科・教授 (13901)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	スティッチ ステファン (Stich Stephan)		
研究協力者	マシェリー エドワード (Machery Edouard)		
研究協力者	ハニカイネン イバー (Hannikainen Ivar)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

米国	University of Pittsburgh			
----	--------------------------	--	--	--